ＨＯＨＯＭＡＫＩＮＧ

盛

Night 01

呪詛都市

第二稿

脚本＼小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003＼10＼18

登場人物

黒井　ミサ(17)

田上　寛(38)……興信所嘱託調査人

山中　博美(22)……ナレーター・コンパニオン

佐野　毅(25)……痩せた若い男

刑事

若い刑事

梶山……KJ探偵社　取締役

イベント・コンパニオンの女1

2

3

カメラマンの男

訪問販売員の男

○繁華街／夜

東京、現代。
ヘッドライトの光が奔流となって流れ、人型の影が街の明かりを背にゆらめく。
雑踏の声と、携帯の声が輻輳。
ノイズ――。全てが、ノイズ。
道の真ん中で、ポツンと一人立つ学生服の少女。
未だ幼い顔だちは感情を一切浮かべず。
周囲を通り過ぎていく者が、刹那に眼を向けていくが、それだけ。
雑踏という、集合的なものの個々の眼。一つ一つに意志などない。
が――、瞬間的に、突き刺す様な強い視線がイメエジとして浮かぶ。

ミ　サ「（ハッ）！」
振り向くミサ。視線の主を雑踏の中に探すが――、もう、そこにはいないのか――。
ミ　サ「……。（思案）」
ミサ、自分の格好を見てやや怪訝そうな表情。
そして回りを見回す。
『あたし……、何やってたんだろう……』
ミサ、歩きだす。この世界の中へ。

○下町／工場街

人寂しい場末。どこかからプロ野球ニュウスの声が漏れ聞こえてくる。
道を歩いてくる、ショルダーバッグを下げ、手にメモ紙を持った男。中年にさしかかり、暗い翳を顔に縫い付けた、田上という男。
とあるモルタルアパートの前に立ち、明かりの消えた窓を見上げる。

メモ紙に添付されていた、小さな男の顔写真――。

○アパート内

裏手から、鉄の階段を登っていく田上。
二階の外廊下には、雑然と物が放置され、真っ直ぐ歩けない。
一番奥の部屋の前に来る。「木村」の表札。汚い手書き文字の回りには、○や三角といった単純なマークが幾つも描かれている。
『ここか』とメモを仕舞い、ノックをしようとしてドアを見ると――

田　上「！」

ノブの下辺りに、奇妙な落書きがあった。何かの記号の様なものが手書きで描かれていたのだった。
田上、言い知れぬ悪寒を感じた。
いや、それだけではない。田上、鼻を鳴らし、やや顔を顰める。臭気――。
田上はポケットからハンカチを出し、ドアのノブに被せて――、ドアを開ける。

○アパート室内

田　上「！」

暗い室内に、人が斜めに立っていた。
あまりの異様さに、田上、何がそこにあるのか必死に認識しようと、バッグから小型フラッシュライトを出して照らす。

田　上「――（呻く）」

それは、天井から首を吊り、硬直している男の死骸だった。脚を床につけたまま、倒れてそのまま死んだらしい。床には夥しい何かの紙片。
しかし、何より異様なのは、その男の死に顔だった。
30前くらいの、筋肉質の男だったが、その顔には

ドライバーの先で突いた様な幾つもの傷穴が開いていた。

田　上「――！」

田上、死骸の側へ靴を脱いで近づこうとすると――

ドン!!　背後から鈍い音。

田　上「!?」

ドアが勝手に閉まったのだが――、そのドアの内側には、赤黒い手形がベットリとついていた。

田　上「――」

と！　窓が突如開き、風に煽られる室内。

田　上「なっ――」

夥しい紙片には、全てあの記号が大書されている。

記号が死骸の回りを舞飛んでいる。

田　上「――（慄然）」

束の間、凍りついていた田上だが――、おもむろにバッグからデジカメを取り出し――、

暗い室内に灯るストロボ光。斜めに傾いだ死骸の顔に眩い光がぶつけられる。

○繁華街／夜

交差点。夜遊びに出る人々が信号が変わるのを待っている。

ミサ、その中に混じってポツリと立っていた。

と――、その脇に立つ若い女。

女　「（携帯に）はい山中ですー。――え？　9時集合じゃなくって？――」

女、手にはリボンのかかった一抱えもある兎のぬいぐるみを持っていた。

博　美「（ぬいぐるみを嫌悪の眼で見つめ）――あ、はーい。了解ですー。どうもお疲れ様でーす」

携帯を切り、兎をガードレール脇に放り棄て、横断歩道を渡っていく女――。

ミサ――、打ち捨てられた兎をじっと見つめている。

ミ　サ「――」

ミサ、兎を拾い上げる。可愛いとは言えない意匠。どうやらぬいぐるみ型リュックらしく、肩ベルトがついていた。
リボンをとり、リュックを背負ったミサ、雑踏の中へ消えていく。

○住宅街

さっきの女、博美が自宅マンションまで帰宅してきたところ。
大振りのバッグから鍵を出そうとしつつ歩いてくると――

博　美「――（小さく気づき）」

立ち止まり、ゆっくりと振り向く。
細い路地の暗がりを、じっと見つめる博美。

博　美「――」

漆黒の影の中に、何か蠢く者がいる。不確かな、人の形をした影――。うっすらと赤い双眸――。

博　美「（小声）――あたしには見えてるよ……」

影、博美の声が聞こえているのか、僅かに反応。

博　美「そんな無様な格好してまで、なんでこの世にいたいのか、あたしには判んない――。どうせあんたたちには何も出来ない――」

蠢いていた影、闇の中に溶けて消えていく。
博美、薄ら笑みを浮かべ、じっとそこに立っている。

○場末／アパート前

工場街に、赤色灯の光が当たっている。
パトカー、救急車がアパート前に止まっており、制服警官らが無線連絡などをしている。

――――――――――――――――――――

アパートから出てくる、刑事らしき男――、周囲を

見回し、煙草を吸っている田上のところに近づく。
刑　事「――あんたが田上さん？　発見者の」
田　上「（頷く）」
刑　事「――（眼を細め田上の顔を見入る）――れ……。あんた」
田　上「（無意識に顔を伏せ）」
刑　事「田上――、そうか、あんた、本庁機捜隊にいた……」
顔を強張らせる田上。
刑　事「（ニヤ）色々あったみたいだな。で、今は興信所の探偵か」
田　上「もう、帰りたいんだが」
刑　事「あの男、なんで家庭も名前も仕事も全部棄ててあんなとこ住んでたんだ」
田　上「――それを調べていた」
刑　事「依頼人は」
田　上「――（救急車に運ばれる担架を見ながら）奴の妻だ」
刑　事「金か、女か――、どっちにしてもつまらん原因だろう」
田　上「つまらんから、失踪人探しなんて本腰は入れられないか」
刑　事「（ムッ）――だからあんたらが飯喰えるんだろうが」
田　上「――仏の顔、見たんだろ」
刑　事「――ひでえな……。ああいう死に顔、また見るなんて――」
田　上「――また……？」
向こうから若い刑事が呼ぶ。
若い刑事「森さん！　ちょっとすいません」
刑事、田上の前から去ろうとして――
森　　「田上さん――、あんたも、奥さんや子どもと別れたんだったな。よく、自殺しなかったな」
田　上「――あんたも、そうならない様に気をつけた方がいい」
森、苦笑し、去っていく。
田　上「――いつだって出来るからさ……」

○夜の公園

繁華街の裏手にある、静かな公園。向こうの喧騒が僅かに聞こえている。
ミサ、ゆっくりと歩いてくる。と――、大きな遊戯

施設の壁面にある落書きに眼を止める。
カラー・ギャングらの自己顕示的落書きに混じり、異質なものがあった。

ミ　サ「――」

それは、自殺した男のドアに描かれていたものに似た、形からして禍々しい記号。

ミ　サ「――（呟き）この街は――、呪いに満ちている……」

ミサ、学生服のポケットから黒い柄の短剣・アサメイを取り出し――、全身に気を張る。

ミ　サ「（小声）ヘイカァス、ヘイカァス、エスティ・ビ・ベロイ――」

アサメイでサッと宙に紋を描く。
と――、壁面の呪章がグズグズと崩れ、読めなくなっていく。
ゆっくりと、腹から息を吐き出すミサ――。
と、そのすぐ背後から若い男の声。

男の声「ダンスの練習とか？」

術に集中しており、すっかり油断していたミサ、かなりうろたえつつ振り向く。

ミ　サ「へっ？」

痩せぎすの、くたびれたスーツ姿の若い男が力無く立っていた。

ミ　サ「――（じっと男を見つめる）」

若い男「いや、カッコ良かったよ、マジで」

ミ　サ「――」

若い男「じゃあ」

不自然に片手を挙げ、去ろうとするが――

ミ　サ「――（じっと見つめている）」

若い男「んと――、僕と話してて、不快そうじゃないみたいだけど……、気が合ったりして」

ミ　サ「……」

若い男「――な訳ないか……。じゃっ、じゃあ……」

ミ　サ「――」

若い男「――3万でどう？」

ミ　サ「――」
若い男「5万？……」
ミ　サ「――」
若い男「――御免……。売りやってないんだ。僕、そういう子としか話した事無いから……」
ミ　サ「……」
ミサ、何かを想いつつ、立ち去っていく男を見つめている。

○新橋／雑居ビル街／翌日午後

「ＫＪ探偵社」の看板のあるビル――。

○ＫＪ探偵社

閑散とした事務所内。その片隅の机を借り、田上がノート・パソコンで新聞記事の検索をしている。
と、ドアを開け入ってくる中年の男、梶山。
梶　山「お、田上さん来てたの」
田　上「（眼をディスプレイに向けたまま）報告書、出しときました」
梶　山「（自分の机に向かい）やっと見つかったか」
田　上「死後約二カ月ですが」
梶山、報告書を手にとって斜め読み。
梶　山「――そっか。ご苦労さんでした。で、今何探してんの」
田　上「ええ、ちょっと……」
検索リザルトの中に、気になる文字列を見つけた田上、リンクを辿る。
田　上「――！」
小さなベタ記事。三十台ＯＬの自殺記事。
陰鬱な顔の女の荒い写真が浮かぶ。
田　上「（記事を小さく音読）――女性は顔が判然としないまでに潰れており――」
思案する田上。

梶　山「田上さん、あと何件抱えてたっけ。もうちょっと頼まれれてくれないかなぁ。何なんだろねぇ、ホントに最近の警察、何してんのかねぇ、っていやその、田上さんに文句言ってもしょうがないんだけどさ。くははは」
田上は梶山を無視し、検索を続けている。
田　上「こいつも同じエリアか――、練炭に顔を突っ込み――」
眼の細い大柄な男の顔写真。
田　上「――顔、か……」

○潰れた中古家具店内／ミサの部屋

ミッド・センチュリーの、モダンな意匠の家具が無造作に並べられた部屋。
ソファで、兎に寄り添う様に眠っていたミサ、眼をこすりながら、眼を、覚ました。

様々な椅子に座っているミサ――。
寂しい一人遊び――。
その相手は、兎。

ミサ、兎のジップを開け、中に分厚い魔法書・グリモワールと、アサメイを入れて――、リュックとして兎を背負う。

○イベント・スペース／控え室

未来風の衣装を身につけた若い女達数人が、自分達でメイクするのに余念がない。
その中にいる、博美。鏡に映る自分の顔を入念にチェック。

女　1「今日ってやっぱ親父ばっか？」
女　2「決まってんでしょ。じゃなきゃこんなカッコ有り得ない」
女　1「だよねー。これじゃコスプレじゃん」
女　3「てゆかさ、そこの廊下、なんか怖くない？」

女　1「怖いって何が」
女　3「なんかー、暗くって超怖いんだけど」
女　2「君は霊感少女か」
女　3「うーん、ちょっとあるかもー。って、そうだ、ねぇ」
女3、博美に
女　3「山中さんだっけ？」
博　美「――（微笑し頷く）」
女　3「前にサイテックの仕事で、喜美ちゃんと一緒だったって」
博　美「――うん」
女　3「そん時、ステージの裏で山中さん、変な子ども見た、って……」
女1、2、博美に注視。
女　2「――霊感女……？」
博　美「――（微笑）見えるよ、あたし……」
と、突如ドアが叩かれる。
ギョッとなる女達。
進行バイト「すみませーん、そろそろステージの方へお願いします」
女　1「あっ、はーい！」
女達、出て行く用意。

○イベント・スペース／ステージ

デジタル・デバイス企業の、広報発表会。広いスペースだが、記者やカメラマンの数はそう多くない。
華やかなステージで、デバイスを手に笑みを浮かべて並んでいる博美たち。
広報部長「――えー、本製品の特色といたしましては、従来型の四倍もの転送速度を誇っており――」
ストロボの放列は、部長ではなく女達にばかり向けられている。
目線を万弁無く送っていく博美――、一番端から、執拗に博美ばかりを狙っている若い男がいた。
博　美「――（笑みを向ける）」

カメラは、博美の顔から、胸――、腰――脚を狙う。

博　美「――」

○住宅街／マンション前

主婦らしき女と立ち話をしている田上。

主　婦「――自殺するなんて人じゃなかったんだけど……。だって……（やや言い淀み）、すごく気が強い人で（苦笑）」

田　上「――死んだ時の様子、聞いてます？」

主　婦「――噂で……。顔が……」

田　上「あの、こういう男の人、見た事ありません？」

田上、古アパートで死んだ男の写真を見せる。

被りを振る主婦。

○マンション／廊下

上ってくる田上。

自殺した女の部屋の前へ来る。新聞が山の如く突っ込まれ、荒廃した雰囲気。

田　上「――」

表札を見上げる。名前の札に、あの○などの記号が書かれている。

田　上「――（思案）」

と――、おもむろに屈んでドアのノブの辺りを見る。

田　上「（呟く）あった――」

あの男の部屋と同じ、忌まわしい記号が小さいながらも書きなぐられていた。

田上、それを撮影しようとデジカメを取り出す。

○繁華街／夕刻

黄昏の街。

ミサは兎を背負って、そこにまた立っている。

眼を閉じ――、片手を耳に寄せ――。

ミサは聞いている。逢魔が刻の、街の辻で聴く事が出来る声を――。

○赤坂／夕刻

イベント会場を出た博美、やや疲れた顔で坂を上ろうと歩きだした。

と――、博美、背後に気配を感じて振り向く。

博　美「――」

若い能面を被った様な男が、カメラを手に博美を見つめていたが、振り向かれハッとなっている。

博　美「――」

博美、無視する事に決め、背を向け歩きだす。

若い男、声を出さずに、どう話しかけるか散々頭の中でしてきた練習を再度始め――、博美の後を追う。

○繁華街

街の声を聞いているミサ――。

と、聞き覚えのある若い男の声が。

男の声「前に遇った事、あったよね」

ミサ、振り向く。

気の弱そうな、痩せたあの男が立っている。

ミ　サ「――記憶がいい方じゃないんだ、あたし」

若い男「――そんなに若いのに？」

ミ　サ「――若い、のかな……。あたし……。ただ、この一年分くらいの記憶、無いんだよね……」

若い男「――それは大変だな」

ミ　サ「――大した事じゃない。一年なんて――」

若い男、理解出来ない顔――。

○別のマンション／廊下

やはり顔を潰して自殺した者の部屋の前に来ている

田上。
ドアの回りを見探している。
田　上「――ここもだ……」
あの禍々しい記号。
と――、向こうの方からインタフォン越しの声。
主　婦「（険しく）ウチ結構ですから!!」
田上見ると、訪問販売の男が立っていた。
訪問販売員「またよろしくお願いしま――」
バチンという音で切られるインタフォン。
小さく舌打ちし、ノートに書き付ける男。
田上はじっと見つめている。
訪問販売員、ノートを仕舞い――、表札に何かを書きつけている。
田　上「あの、ちょっと聞きたいだけど」
ギョッとなって、いきなり脇に来ていた田上を見つめてる訪問販売員。

○繁華街

恋人同士――とは明らかに見えないものの、しかし奇妙な結びつきをしているミサと若い男――佐野。
二人は人の流れに逆らう様に、ゆっくりとした歩みで並んで歩いている。
佐　野「――学校、どこ？」
ミ　サ「――今の学校、どこだか判らない……」
佐　野「厄介だね」
ミ　サ「そうでもない……」
佐　野「僕もね、まあ学校じゃ大した存在じゃあなかったけどさ、これでも県の検定じゃベスト５０に入ったんだ。これっ自慢？」
ミ　サ「（関心無い）」
佐　野「資格なんてさ、はっきり言ってバカでもとれるっていうか受からない奴なんて最初っから志望間違えてるっていうかさ。そういうの、才能とかっていうつもりもないけ

どもさ、そういう才能持った人にはそういう仕事をさせるってのが筋だと思うのよ」

ミ　サ「――」

○路地

訪問販売員に缶コーヒーを手渡す田上。

訪問販売員「――ども」

田　上「――表札ンとこに書く奴、あれってお宅らの一種のコミュニケーションなんだ？」

訪問販売員「（苦笑）そんな大袈裟なもんじゃない。まあ、嫌な奴だったらバツ書いておけば、後から来る奴も嫌な思いしないだろうって」

田　上「落ち易い家だったら、○とか」

訪問販売員「まあね」

田上、デジカメを出してプレヴュウ操作。

訪問販売員「？」

田　上「――こういう――」

田上、ディスプレイを相手に見せる。

田　上「記号？　みたいなの、見覚えないかな」

訪問販売員「――ああ……」

田　上「お宅らの仲間？」

訪問販売員「――仲間っていうか……、変な奴だったなぁ」

田上の眼、鋭くなる。

田　上「変な奴……」

訪問販売員、ディスプレイに映し出されているものを忌ましそうに避け――

訪問販売員「こういう風に残るんだよな……。俺たちが感じた嫌な気分だとか――。あいつだけが変じゃないって事か」

田　上「――あいつって、誰なんだ。教えてくれないかな」

訪問販売員、曖昧な表情で田上を見る。

田　上「――」

○赤坂／一ツ木通り

博美、地下鉄駅へ向かって歩く。
そのやや後方から、若い男が近づいていく。
男　「（ブツブツ）――もしモデルになってくれたら、本当に嬉しいんです――。絶対変な真似しませんから――」

博美、背後からする靴音に苛立ちを募らせ――。
博　美「――（呟く）あなたが悪いんだからね……」
博美、眼を見開き――、サッと振り向く。
若い男、一瞬喜色を浮かべるが――、博美の見開いた、冷たい、あまりにも冷たい視線に凍りつく。
男　「あ……」

周囲の温度をも一気に下げ、雑音までかき消すかの如く――。
と、博美、すっと視線を外し、再び背を向けて歩きだす。
博美の後方――、凍りついたまま立ち尽くしている男――。そこに突っ込んでくる車――。
激しいブレーキ音――、そして、激突音。
博美、振り向かない。
男の果てる姿は、既に見ていたのだから。
山中博美――、人を呪う眼を持った女。

○繁華街近くの公園

二人が出会った公園。ミサと佐野。
佐　野「――だから人が向いてないって仕事を振る方が間違ってるんだよ！」
ミ　サ「――だから――、呪ったの……？」
佐　野「――（虚を突かれ）え……」
ミ　サ「死を招くソロモンの紋章、あなたは覚悟も無く使ってい

た――」

佐　野「――ああ……」

公園の遊具に描かれている紋章。自殺者の家のドアに描かれたものと同じ。

佐　野「ネットで見つけたんだ。死んでしまえって思う奴に出来る事――」

ミ　サ「――（哀しみを眼に浮かべ）闇の力、そんなに簡単に使えてしまうなんて――」

佐　野「（微笑）そうだよね。大昔だったら、魔術師だとか魔女だとかが秘伝にしてきた様な事、今ならネットで簡単に検索出来ちゃう。そういう時代なんだ」

ミ　サ「――手続きは簡単になったって――、その力を行使する者が背負う重さは変わらない」

佐　野「――どういう、事……？」

ミサ――、佐野を見つめる。

○ＫＪ探偵社／事務所内

薄暗い室内。パソコンに向かう田上以外の人はいない。

新聞記事を検索していた田上――、ある記事を見つけ、表示させる。

男の顔写真が荒く浮かぶ。無表情な佐野の顔。

○フラッシュ

訪問販売員「――あんた、会えないよ。だって――、そいつもう二年も前に死んだんだから」

○ＫＪ探偵社

見出しに「会社員、自室で変死」

田　上「――（声無く呻く）」

訪問販売員「（オフ）訪問の営業なんて仕事、向いてる奴なんか

いやしない。我慢出来る奴と出来ない奴の違いしかない。
あいつは――、出来ない奴だったって事さ……」

田　上「――（呟く）どういう事だよ……」
天井を仰ぐ田上。

○繁華街近くの公園

対峙するミサと、佐野。

ミ　サ「――あなたは、人を呪う為に闇の力を呼び出した」
佐　野「――」
ミ　サ「代償は、あなた自身の魂で払わねばならないという事、
あなただって判っていたんでしょ」
佐　野「――ああ、知ってたよ……」
ミ　サ「だから、あなたはもう死んでいるの」
佐　野「――」
ミ　サ「あなたはとっくに、生きた人間ではいられなくなってる」
佐　野「――（力なく笑み）そっか……。なんか変だとか思って
たんだ……」
ミ　サ「あなたはもう、ここにいてはいけない」
佐　野「僕は――、地獄に行くのかな……。地獄で永遠に苦しむ
なんて、いやだな……」
ミ　サ「――（眼を伏せ、ゆっくりと首を振り）あなたは生きる
事にすら執着出来なかった。地獄でだって、永遠の存在
なんかになれない」
佐　野「――じゃあ、僕はどうなっちゃうのさ」
ミ　サ「――無になるだけ」
佐　野「――なら、いいや……。そうか……。そうなんだ……」
ミサ、兎リュックからアサメイを抜き――、バトン
の様な動きで印を切り――
ミ　サ「（おごそかに）ヴェイダ・エクス・ヴィーネ・エム！」
佐野の顔、不確かな影となってディストーションと
化していく。
佐　野「（オフ）君、一体何なの――？」
ミ　サ「――黒井、ミサ――。魔女――」

乾いた佐野の笑い声が遠くから聞こえる。佐野の姿は、影となって――、そして消えた。永久に――。

ミサ――、哀しげに立っている。
と、遊戯具に描かれていた紋も崩れ消えていく。
ミサ、街の灯に向かって歩きだす――。

ミ　サ「――（小さく、抑揚無く）エコォ・エコォ・アザ・ラック――。エコォ・エコォ・ザメェ・ラック――」

○繁華街／夜

ミサ、歩く――。
と、向こうから、歩いてくる田上――。

田　上「――（モノ）もう仕事とは関係ない――。俺には関係のない事だ……」
すれ違う二人――。
ややして、ハッと振り向く田上。

田　上「――（怪訝）今の子――、どっかで――」
雑踏の中に消えていくミサの後ろ姿――。

田　上「――」

以下次回